

氏名	MOK Junghoon (モク ジョンフン / 睦 楨薫)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第53号		
学位授与日	平成26年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	建築における「対立的空間」の構築に関する研究 — 「不調和」からうまれるポジティブ・スペース		
審査委員	主査	教授	久保田 晃弘
	副査	准教授	濱田 芳治
	副査	教授	田淵 諭
	副査	女子美術大学芸術学部 教授	飯村 和道

## 内容の要旨

我々は、一つに決められた原理、あるいは原則によって画一化され、より多くのことを失ってしまうのではないか。また、現代社会では多数に対する普遍的、かつ合理的な思考が優先となり、その普遍的な価値に及ばない存在は排除されてしまう。私は中心的な視覚から離れ、共通の関心の引かれにくいものに引かれ、そこで感性を見つける。

世の中は建築を含むきわめて様々なものごとの集合として成り立っている。それらは対立する様々な要素の相互関係によってつくり出されているため、一つ一つを分析することはできても、それらを全体的一元化した形式言語として語ることは強引であろう。

一方、建築も様々な要素の集合で成り立つ存在であり、集合体の具現化であるとも言えるが、一般的に我々が認識している「集合」とは、均質な配列にしたがって組織化する「全体」を単調な「部分」の集まりとするものである。しかし、単に均質な要素と要素の集まりを真の集合体と呼ぶことはできない。「部分」と「全体」の関係の間には必ず「境界」が存在し、その境界の領域からは「対立性」が必然的にもたらされるため、その「対立的関係」のあり方について考えることが重要であると考えます。

人間は環境に対して二つの考え方をもっている。以前の場合、環境は外部の侵略から我々を守ってくれるものであり、必要によっては征服すべきものだと思えるのに対して、現在では人は環境と平和のうちに生きるべきであり、両者は共に生きるべきであるという考えが支配的である。しかし、現代建築の豊かな成果は、これらの対立する二つの見方のいずれが正しいかという議論からもたらされるものではない。この征服と調和という対立する考えの両方を建築の方法に取り入れることが、創造的な建築が持つ、ある種の緊張感をもたらすことに繋がるのではないかと思う。私はこのような建築空間の対立的要素をそのまま組み合わせることから生まれる「対立的調和」はあり得るかについて考察する。

現代建築における「対立性」と「対立的空間」の構築について研究を行うため、「共存性」、「境界性」、「曖昧さ」などの概念を「対立的空間」の構築における「必然的要素」として考察している。建築設計における「受容的アプローチ」からもたらされる「共存性」は、様々な「対立的関係」を含みながら、「境界」を明確に、あるいは「曖昧」にし、空間的には「等価的關係」として表れることに着目している。このように、本文で使われているこの「対立性」という言葉は普遍的な「二つの判断や状況が両立できず、互いが排斥する」という意味だけでなく、対立的要素の「共存」という受容的な意味も含んでいる。

これらを分析することによって、現代都市建築における「対立的空間」のあり方や必然性が把握できる。本論文のテーマはそのような見落とされた建築における「対立的関係」への問いかけから始まっており、現代都市における建築空間の理論的な接近と空間構成の分析を行い、建築計画における「対立性」のあり方や「対立的空間」の構築を目的し、その構築プロセスが、現代建築、さらにはこれからの時代の建築の設計に対して、新しい方法論を提示することを望みたい。このように、本研究は、それぞれの異なる構成要素の特性を分析するよりも、それらの相互対立的な関係によって全体の秩序が成り立つ「対立的空間」の構築とそのプロセスに着目したものである。その際、異なる建築的要素や環境、文化は必ずしも「ネガティブ」な意味で「対立」するその際、異なる建築的要素や環境、文化は必ずしも「ネガティブ」な意味で「対立」するのではなく、「ポジティブ」なものとして意味づけられることになる。そしてそれらが繋がって建築空間といかなる関係を築いていくのか、これが本論の眼目である。

## 審査結果の要旨

本論文の著者のモク・ジョンフンは韓国出身の建築家である。「建築における対立的空間の構築に関する研究」と題された本論文は、建築空間としての「対立的空間」の構築を論じたものである。本論文において、この「対立的空間」という言葉は、サブテーマとして記されている「不調和から生まれるポジティブ・スペース」を意味している。つまり「対立的空間を構築する」ということは、不調和で対立的な空間的要素を調和のとれたポジティブ・スペースへ導く、ということに他ならない。

本論文は大きく4つの章から成っている。第1章では、本研究の背景や目的、研究方法について述べた後、本論文のテーマである「対立的空間」の構築の必要性について説明する。続く第2章では、具体的な「対立的空間」の構築プロセスについて「受容的アプローチ」「対立的関係の形成」「境界性」という3つの概念から考察を行なう。

そして第3章では、以上の考察や分析にもとづいて、その実験的実践としての作品制作を行った。計画地として採用した「谷中5丁目」は東京都台東区に属し、関東大震災や第二次世界大戦のときにも破損が少なく、旧来の町並みや建造物が残っている。そのため、お寺や霊園、天王寺、新しく活性化されている商店街、外国人向けの宿泊施設、などの複数のコンテキストが関係しているのが特徴である。敷地は約1,146平米の第一種住居地域であり、現在は2階建の木造住宅群で囲まれた住宅街である。

著者は《谷中プロジェクト》と題して、この敷地に住宅と外国人観光客のための宿泊施設ならびに複合住居環境を計画した。この提案では、霊園と住居、住居と宿泊、古いものと新しいもの、日常と非日常、低層環境と高層環境といった様々な「対立的コンテキスト」が、設計の土台として用いられている。

結果として著者は「アーバン・ヴィレッジ」と「アーバン・ヴォイド」という2つのプロジェクトを、この敷地に対して提案し、本論文の方法を現代の都市建築に適用する可能性について論じた。いずれの場合においても、まずは「対立的空間」を構築するため、対立的要素の間の「境界」を意図的に設定し、そこから表れる「対立性」を有した空間を構築した。対立的建築空間の構築は、メタファー的考察による「境界の拡張」やそこから生まれる「不調和」を必然的にもたらす。

「アーバン・ヴィレッジ」では、都市建築を強く認識し、比較的狭い面積に空間的な広さを満足させるために、容積率は最大の300%に設定し、高さ制限のギリギリのところまで立ち上がる建築を提案している。現代の都市建築はその多くが高密度な地域に計画されることが多く、敷地が狭く、建蔽率も厳しくかかってくるため、部屋を上下に重ねていくより他に方法はない。

「アーバン・ヴィレッジ」も同様に、基本的には上下のコントロールによって空間プログラムを決めていく。

住宅地における路地は近所との自然なコミュニティーを生み、町全体に活気を吹き込む役割をする。「路地」は社会からの欲求と個人のメッセージが重ねられている公の場でありながら曖昧な境界の領域でもあるため、もともと存在していた家や路地はそのまま残し、敷地を9等分し、容積率だけを増やす。既存の2階建ての住宅群より高いレベルに、旅行者が滞在するための20個の個室を設け、その下の1階には5つの商業施設をおくことで、商業と住居生活の複合を目指す。その結果、住居面積は既存と変わらず、全体的には商業と住居生活ができるものに変化した。2階には「住宅」と「宿泊」という異なる空間のプログラムが絡み合っているが、その「対立的」要素をそのまま受容し「共存性」を保つようにすることで、住居と宿泊の空間的境界が曖昧になり、本論文のテーマである「対立的空間」の構築が実現する。

しかしながら「アーバン・ヴィレッジ」は「構築」というフィジカルなことだけに焦点を絞った結果、逆に様々な問題を生み出した。都市と複合施設というコンテキストを受容するために建築法規に合わせて容積率をギリギリの最大値に設定したことで、全体が巨大なヴォリュームになってしまい、そのことが谷中が持っていた固有性を大きく変化させてしまう恐れがある。そこで、次の作品「アーバン・ヴォイド」ではこうしたデベロッパーのような巨大開発ではなく、地元の人々の参加や昔から谷中が持っている固有性を保つ、よりコンパクトなプロジェクトを提案した。

谷中プロジェクト2としての「アーバン・ヴォイド」は「アーバン・ヴィレッジ」と同様の構築プロセスで、既存の古い街の中に新しい建築プログラムを挟み込み、建物の位値や形態、ファサードに至るまで、新しいアプローチで肯定的な意味としての「対立的」構造を造り出す作業として計画された。

一般的に「隙間」という言葉には否定的なイメージが強いが、このプロジェクトではそれを「emptyspace」ではなく「voidspace」として扱い、都市への拡張ができるようなネットワークを造るために利用した。そのために著者は2つの手法を採用した。1つ目は、かつてのこの街と建築の歴史的な価値を大事にしつつも空間の質を現代的に変更し、パブリックな性格を与えることであり、2つ目は、現代的な要素と伝統的な要素が「対比」という表現として共存することで、そこから今の時代の新しさを生み出すことである。

増改築が行われる6棟の木造住宅は、その敷地やまわりの風景ができるだけ一体的になるようにし、外国人に対しても違和感のないデザインにしなが、日本の伝統的な木造住宅の雰囲気を活かす。6棟のうち5棟はなるべく本来の姿を保存しながら改築することとし、敷地の中央に位置するひとつの建築だけは、全く新しい建築として建て換える。そして3つの「ガラス・ボックス」を新しいシステムと既存の環境が取り持つ「境界」に設ける。この新しく設けられるガラス・ボックスによって、日本の法律が生み出した建物と建物の間隙が地域に開かれた皆のためのパブリックスペースへと変容する。新しいものと既存のファサードを保ちながら対立させ、繰り返すことによって、建築の時間性や新しさが生まれ、街全体には対比的なリズムが生まれる。新しく増改築する5軒の古い建物は互いが「独自性」を持ちながら、全体的には独立した建築が造り出す集合的な風景として現れる。

「アーバン・ヴォイド」はこのように、新しく造られる建築それぞれが一つの独自の存在として位置すると同時に、それらが持っている隙間がセットとなり街全体の風景を造り出す。まったく新しく建てられるひとつの建築は、地元の人々や訪れる人が自由に使う場所であり、4つの方向から建物の中を貫通し自由に通ることができ、集まることにふさわしい一つの大きな「広場」のように空間計画されている。

以上のように本論文は、現代建築空間の強引な「単純化」や「二分法的合理化」を再考することを出発点に、「対立的」な要素の集合から発生する建築空間の特性としての「対立性」や

「共存性」「等価性」「境界性」を用いた「構築プログラム」を通して、現代建築に新しい可能性や方法論を提示することを試みた。

その「曖昧さ」はケネス・バークの言う「メタファー的考察」から生まれる「不調和」という概念にも通じている。これは著者による対立的空間の構築プロセスにおける「境界の拡張」と同じ手法であり、そこから生まれる「不調和」は、逆説的な表現や曖昧な詩的表現を許容する。このように、著者はこのケネス・バークの「メタファー的考察」という概念を「対立的空間」の構築プロセスとして参照し、その「不調和」という概念を、対立的建築空間の体験から引き出せる空間的感動に繋げていった。対立的建築空間における「不調和」は必然的なものであり、部分的な不調和が全体の調和によって正当化されることで、ネガティブ・スペースをポジティブ・スペースへ導くことが可能になる。

本論文はさまざまなコンテキストを同時に受け入れることから生まれる「対立的」な現象を、建築における「空間構築要素」として扱い、その意味と具体的な活用方法について研究を行った。「対立」という一般にはネガティブだと見做されている概念を反転させ、そこから新たな建築の可能性を見い出そうとした本論文のアプローチは斬新であり、その今日的かつ建築デザイン的な意義は非常に高い。以上のような観点を総合し、審査委員の総意として、本論文を学位を授与するに相当のものと認める。

(久保田 晃弘)